



## 1月号を担当したのは

氏名：朝倉 美桜

趣味：ピアノ

好きな時間：友だちとしゃべっているとき

好きなもの：ねこ

私の目標：高校の国語の先生

## 1月号

### 平安のロミオとジュリエット～光源氏と朧月夜～

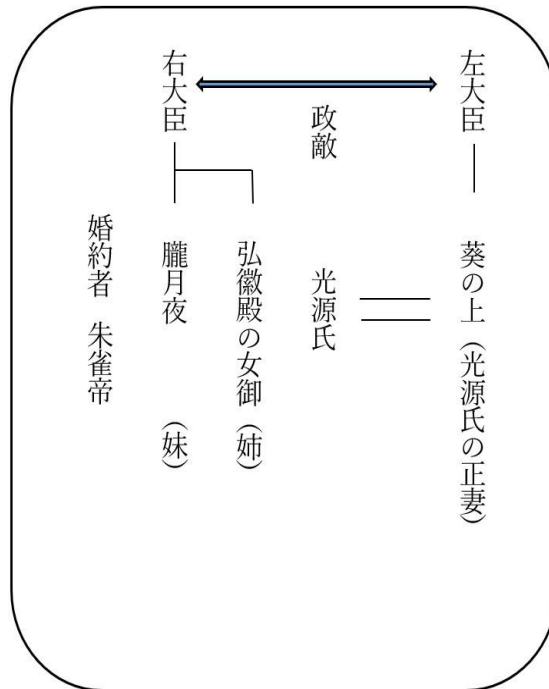
---

私なぜ、朧月夜を担当するかというと、大好きだからです。

私は、『あさきゆめみし』という漫画を読んで、『源氏物語』が好きになりました。たくさんの登場人物がいる中で私が一番惹かれたのは朧月夜で、いつも心の中では「おぼちゃん」って呼んでいます。漫画の中での彼女は、美しい容姿と華やかな性格で男性の心を捉えて離さない魔性の女として描かれ、自分に自信を持って人生を自由に突き進んでいきます。序盤は、周りの人への影響を考えず、自分がやりたいことに素直に生きる姿が描かれていますが、物語が進むにつれて、自分の行動に責任を持つ自立した大人の女性へと成長します。



## 【人物関係図】



隴月夜は右大臣の六女です。源氏は左大臣の娘の葵の上と結婚しているので、彼女は源氏にとって政治上のライバルの娘ということになります。彼女は、平安時代の高貴な姫らしからぬ、自由奔放でおおらかで明るい性格が魅力的な女性でした。また、とても現代的で平安時代にいないタイプの女性でした。例えば、平安時代の女性は室内では膝をついて移動し、控えめに話すことが一般的でしたが、隴月夜は立って歩いて、はっきり声を出す、常識にとらわれない自由な人物でした。



### 容姿は大変美しく、性格は華やかで大胆

姉である弘徽殿の女御は、右大臣家を繁栄させるために、隴月夜を天皇と結婚させようと考えていましたが、情熱的な恋をしたい彼女は乗り気ではありませんでした。

ある宴会の夜、源氏は藤壺という女性を探していましたが会えませんでした。代わりに開いていた扉をのぞいてみると、隴月夜が美しい声で歌を口ずさみながら歩いてきます。①を見てください。

①いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」とうち誦(ず)じて、こなたざまには来るものか。

①<訳>じつに若く美しい感じの声で、しかも並の身分とは思えぬ女が、「朧月夜に似るものぞなき」と口ずさんで、こちらに近づいてくるではないか。(1)花宴 P.356

これは、朧月夜の登場シーンなのですが、「朧月夜に似るものぞなき」という歌を口ずさんでいます。この歌が、彼女の「朧月夜」という呼び名の由来となっています。その姿に目を奪われた源氏は素性を知らないまま、関係を持ってしまいます。その後、彼女が右大臣の姫で、しかも源氏の兄である皇太子と婚約していたと知って驚きます。障害があるほど恋心は燃え上がり、二人は頻繁に会うようになります。②を見てください。

②そのころ尚侍(ないしのかみ)の君まかでたまへり。瘡病(わらわやみ)に久しうなやみたまひて、まじなひなども心やすくせんとてなりけり。修法(ずほふ)などはじめて、おこたりたまひぬれば、誰(たれ)も誰もうれしう思すに、例のめづらしき隙(ひま)なるをと、聞こえかはしたまひて、わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。

②<訳>そのころ尚侍の君が里にお下がりになった。瘡病に長らくおわづらいなので、まじないなども気がねなくなさろうとのおつもりなのであった。修法などを始めて、すっかり快くおなりになったので、どなたもみなうれしくお思いになる折から、例によってこれはめったにない機会であると、源氏の君とお互いにしめしあわせ申されて、無理な工面をして毎夜毎夜お逢いになる。(2)賢木 P.143

「尚侍の君」とは、朧月夜のことです。最後の方に、「わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ」とあります。この部分は、朧月夜が病気を患って実家に帰っている時に、源氏を憎む弘徽殿の女御が同じ家にいるにも関わらず良い機会だと喜んで源氏と会う様子が書かれています。



## 密会が、右大臣に発覚

しかし、源氏との関係が周囲にバレて、帝との結婚が白紙になってしまいます。彼女は高い身分と家の権力よりも源氏との恋を選びました。右大臣と弘徽殿の女御は仕方なく尚侍として出仕させることにします。尚侍は表向きは女官ですが、天皇の寵愛を受けることもありました。尚侍として帝の寵愛を受け、華やかに暮らしますが、源氏のことを忘れられません。二人はこっそりと宮中で逢瀬を楽しんでいました。

ある夜、右大臣に源氏との関係がまだ続いていたことが発覚してしまい、この事件によって源氏は須磨にくだることになります。③を見てください。

③赦(ゆる)されたまひて、参りたまふべきにつけても、なほ心にしみにし方(かた)ぞあはれにおぼえたまひける。

③〈訳〉お許しを受けて参内なさるようになるにつけても、やはり心にしみついてしまった源氏の君のことばかりを慕わしく思い出さずにはいらっしやれないのであった。(2)須磨 P.197

「心にしみにし方ぞあはれにおぼえたまひける」とあります。朧月夜は帝の元に参内しても源氏のことを忘れられず恋しく思っています。帝は自分よりも源氏を愛している朧月夜を責めることはせず、見守ります。時が経つにつれ、帝の優しさや包容力に触れて彼女は少しずつ心を開くようになります。

帝が位を降り、出家すると、朧月夜も後を追って出家します。

④二条の尚侍(ないしのかみ)の君をば、なほ絶えず思ひ出できこえたまへど、かくうしろめたき筋のことうきものに思し知りて、かの御心弱さもすこし軽く思ひなされたまひけり。つひに御本意のことしたまひてけりと聞きたまひては、いとあはれに口惜しく御心動きて、まづとぶらひきこえたまふ。

④〈訳〉二条の尚侍の君を、殿は今でもやはりしじゅう思い出し申しあげていらっしやるけれど、こうした後ろ暗い筋合いのことは厭わしいものとよくよくおさとりになって、あのお方のなびきやすいお心も多少あさはかなものとお思いにならずにはいらっしやれないのだった。その尚侍の君がとうとう出家のご宿願をお果しになった、とお聞きになっては、まことに感に堪えず残念なお気持ちになられて、まずお見舞を申しあげなさる。今出家なさると、せめてそのことだけでもほのめかして下さったらと、そのつれなさを心からお恨み申しあげなさる。(4)若菜 下 P.261

④の最後の方に、「いとあはれに口惜しく御心動きて、」とあるので、源氏が朧月夜の急な出家に驚き、これで二人の関係が完全に終わってしまうことをとても残念に思っていることがわかります。源氏は彼女の決断を受け入れ、準備を手伝います。出家後は穏やかに暮らしました。

源氏と朧月夜は家がライバル関係であるにも関わらず、最後まで良好な関係を続け、お互いの人生に大きな影響を与えた良いカップルだったと思います。平安時代の女性でありながら、現代の私たちに通じるまっすぐな性格や、好きなことを好きだと言える、立場や時代に関係なく生き生きと描かれる朧月夜の姿が素敵だと思いませんか？

本文が難しいと思われたら、『あさきゆめみし』などの面白い漫画もあるので、是非読んでみてください！



※本文と訳は、小学館『新編日本古典文学全集』に準拠しています。なお、引用に際しては(巻、ページ数)で記載しました。

◆京都府立嵯峨野高等学校「京・平安文化論ラボ」の活動は、各SNSで更新中◆

Instagram : [https://www.instagram.com/kyo\\_heian\\_lab/](https://www.instagram.com/kyo_heian_lab/)

X(旧Twitter) : [https://x.com/kyo\\_heian\\_lab](https://x.com/kyo_heian_lab)